

2019年9月25日

各 位

株式会社 ニトリホールディングス

横山大観《山に因む十題 ^{ちょうき}朝暉》

取得についてのご案内

この度、株式会社ニトリ(札幌市北区、代表取締役社長兼 COO 白井俊之、以下ニトリ)では、横山大観による「海山十題」と呼ばれる連作 20 点のうちの 1 点《山に因む十題 朝暉》を取得したことをご報告いたします。

北海道小樽市でニトリが運営する小樽芸術村にて、2019年9月25日から公開をいたします。

小樽芸術村ではすでに、横山大観の《龍》《富士》などの作品を所蔵しており、《山に因む十題 朝暉》が加わることで、近代日本画の巨匠の優れたコレクションがますます充実いたしました。



[作品リスト]

《山に因む十題 朝暉》 [81.2×117.2cm/紙本・彩色/額装/昭和 15(1940)年作]

横山 大観 YOKOYAMA Taikan (1868/明治元年～1958/昭和 33 年)

1940(昭和 15)年、皇紀 2600 年と、自らの画業 50 年とを記念した展覧会で発表された。「彩管報国(絵筆を採って国に尽くす)」を意図したこの連作は、内覧会の時点で完売し、総売上金 50 万円は陸海軍に献納されたという。

「山に因む十題」は、折々の富士を主題とした連作。《朝暉》の「暉」は光や輝きの意で、画題は朝の光を意味する。たらし込みの技法によって、山々と樹木、その周囲を満たす濃密な霧や清浄な空気が表され、墨色の山々と冠雪した富士を結ぶように施された金泥は、その崇高さをいっそう際立たせている。富士の秀麗な姿に日本の魂を象徴させた、大観 71 歳の傑作である。

[作家プロフィール]

1868(明治元)年、水戸市生まれ。21 歳のとき、東京美術学校(現・東京藝術大学)に一期生として入学し、岡倉天心に師事。同校校長を辞職した天心に従い、日本美術院の創設に参加。菱田春草らとともに「朦朧体」と呼ばれた没骨彩色の描法を試みた。天心没後の 1914(大正 3)年には日本美術院を再興し、大正・昭和の日本画壇を牽引し続けた。天心の掲げた「東洋の理想」を追求し、東洋の古典絵画や西洋絵画の要素を取り入れた、豪放で壮大な名作を次々に生み出した巨匠である。

【本リリースに関するお問い合わせ先】

(株)ニトリ 小樽芸術村 (担当:磯崎) TEL :0134-31-1037 FAX :0134-31-1035 otaru-art-base-media@np-inc.jp